

【報告1】 2

## 博物館図書室からみた「連携」の事例 ——ワシントンD.C.・ニューヨーク調査——

栗原智久\*

### 目次

はじめに

1. スミソニアン博物館群とスミソニアン・ライブラリーの関係
2. 国立アメリカ歴史博物館図書室とスミソニアン・ライブラリー・ギャラリー
3. ニューヨーク公共図書館の展示と連携の可能性

おわりに

キーワード 博物館図書室 スミソニアン博物館群 スミソニアン・ライブラリー  
国立アメリカ歴史博物館図書室 スミソニアン・ライブラリー・ギャラリー  
図書室展示 内部連携 ニューヨーク公共図書館 図書館展示

### はじめに

2018年2月27日～3月4日（現地）、アメリカのワシントンD.C.とニューヨークに、主に博物館図書室の視察調査のために出張した。日本の博物館・美術館において、専任のライブラリアンを置いて専門図書室を付設しているところは決して多くはない。中には図書コーナーと言おうか、図書室と呼ぶには少々難のある施設に出会うこともある、とは以前著したことがある。アメリカではどうあるのか、これまでの国内での視察調査をふまえて実地踏査したかたちである。

訪問先は、ワシントンD.C.ではスミソニアン博物館群の中のフリーア・サックラー美術館図書室 (Freer Gallery of Art and Arthur M. Sackler Gallery Library)・国立自然史博物館図書室 (National Museum of Natural History Library)・国立アメリカ歴史博物館図書室 (National Museum of American History Library) ほかナショナル・ギャラリー図書室 (National Gallery of Art Library) など、ニューヨークではスミソニアン博物館群のひとつクーパー・ヒューイット・スミソニアン・デザインライブラリー (Cooper Hewitt, Smithsonian Design Library) またメトロポリタン美術館図書室 (Thomas J. Watson Library, The Metropolitan Museum of Art)・ニューヨーク公共図書館 (New York Public Library)・アメリカ自然史博物館図書室 (The Library of the American Museum of Natural History) などであった。

\*東京都江戸東京博物館司書

みるべきところは、資料のデジタル化とそのサービスに関すること、博物館資料と図書資料のすみわけ、多言語対応のことなど多岐にわたったが、本稿では博物館図書室からみた「連携」のことについて、ニューヨーク公共図書館を含めて事例をもとに以下、報告、考察する。

## 1. スミソニアン博物館群とスミソニアン・ライブラリーの関係

スミソニアン博物館群は、主にはアメリカの首都ワシントンD.C.の中心部に長くのびた国立公園ナショナルモールに建つ。博物館群とあらわされるのは、ワシントンD.C.だけでみても17からなるスミソニアン協会の博物館・美術館・動物園などが存在することによる。

これらの博物館・美術館には各々図書室が付設されている。が、図書室主体にみると、それらはスミソニアン・ライブラリー (Smithsonian Libraries) という管理運営組織に括られるという。各図書室の母体となるのはスミソニアン・ライブラリーということである。本部は国立自然史博物館内にある。

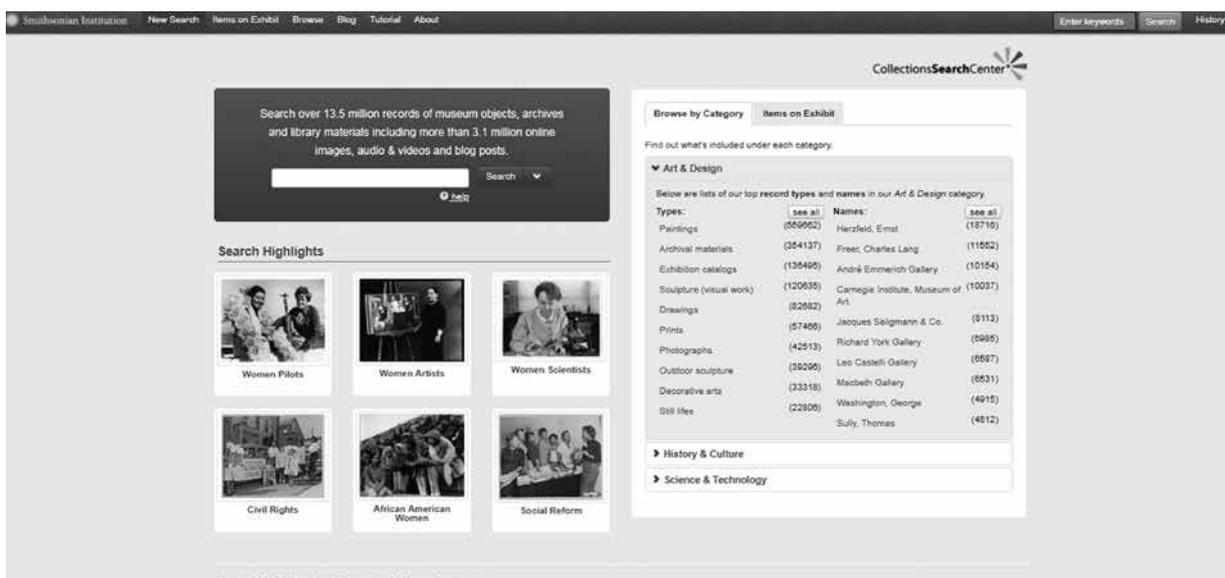
2018年はこのスミソニアン・ライブラリーが50周年にあたるということであったが、ホームページ「Our 50th Anniversary」<sup>1)</sup> 中には次のようなことが書かれていた。

「1968年、スミソニアン・ライブラリーのS. デロン・リブリーはスミソニアン博物館群の個々の図書室を、一管理者のもと、ひとつの統一されたシステムにするよう呼びかけた。図書室は1846年の設立からずっと協会の一部だったが、1968年に独立運営部門となった」

各々の博物館図書室はスミソニアン・ライブラリーのもと、自ずと結びついているとみることができるのである。これをふまえて連携というキーワードからみるに、

- ①スミソニアン博物館群とスミソニアン・ライブラリーの関係
- ②各々の博物館とその付設図書室との内部連携

が注目ポイントとしてあげられる。



【図版1】 Collections Search Center



【図版2】 One Search

①については、2つの所蔵資料検索システムを事例にみてみたい。

まず、スミソニアン全体の（音源・映像を含む）博物館資料、アーカイブそして図書資料まで検索できる「コレクションズサーチセンター」（Collections Search Center）【図版1】<sup>2)</sup>。国立国会図書館の2009年12月9日付「カレントアウェアネス・ポータル」で、スミソニアンの所蔵する資料をワンストップで検索できるサービスとして情報提供されているものである。

これとは別に、スミソニアン・ライブラリーの図書資料を検索できるリサーチツール（Research Tools）「ワンサーチ」（One Search）【図版2】<sup>3)</sup>。各博物館図書室で所蔵している蔵書、電子ジャーナルを含む図書資料すべて、そしてライブラリーが購読しているデータベースの一部を横断検索できる。

「ワンサーチ」は実際に視察調査した各博物館図書室の来館者端末で機能していたが、両検索システムともインターネットで使用できる（ちなみに、スミソニアン博物館群とスミソニアン・ライブラリーは他にも検索システムを有しており、インターネットで使用できる）。

図書資料を調べるには、これらいずれからでも検索可能である。今、ある言葉を使って——例えば“Beatles”という言葉で検索してみる。「コレクションズサーチセンター」ではレコード・写真・ポスター・グッズ等それに混ざって図書資料が検索結果として出てくるが、この図書資料については「ワンサーチ」での検索結果と同じはずである。“The Beatles : now and then”（1998）“The Beatles : memories and memorabilia”（1994）“The complete Beatles chronicle : the definitive day-by-day guide to the Beatles'entire career”（2010）“The Beatles literary anthology”（2004）“The Cambridge companion to the Beatles”（2009）……といった資料が検索できるが、書誌データをみても「コレクションズサーチセンター」では所蔵の情報源は一律“Smithsonian Libraries”となっているところ、「ワンサーチ」では“American Art Portrait Gallery”“National Museum of American History”というように所蔵館がどこであるかの情報も得ることができる。

あるサブジェクトに関して、スミソニアン全体では博物館資料・図書資料をどれだけ所蔵しているかということ。どこにアクセス、アプローチすればよいかということ。もともと連携を考えてつくられているかどうかは措いても、スミソニアン博物館群とスミソニアン・ライブラリーのこれらの検索システムを連携させて（組み合わせて）利用することは、調査を効率的・効果的に進められることにつながると期待できるものである。

## 2. 国立アメリカ歴史博物館図書室とスミソニアン・ライブラリー・ギャラリー

②については、国立アメリカ歴史博物館をもとにみる。

まず、5階に図書室がある。政治史・文化史・科学史・医学史・市民史（含黒人史・移民史）・カタログCM資料などに関する図書資料をコレクションしており、軍事史（Air Forceなど）に関するものは他の機関とシェアしているという。1800年代後半～1900年代半ばの資料が主とのことである。

通路（廊下）をはさんで2室に分かれたうちの1室には大型のテーブルがいくつか置かれ、壁面に書架を配し、来館者端末が用意された部屋となっている。グループ閲覧可能な部屋とみたが、訪問時、テーブルの上にはライブラリアンによってあらかじめ図書資料を並べていただいていた【写真1】。ワシントンD.C.出身のジャズマン——館でそのアーカイブコレクションを誇るデューク・エリントンの本から、アメリカの女性科学者、クラフトビールやファストフード、銀器や家具のデザイン史など、特徴的なものを選んでいただいていたものと思われる。書架上の飾りサインで“ENTRANCE to the EXPOSITION”とあるのが印象的であった【写真2】。

1・2・3階が展示室だが、1階にあるディブナー科学技術史貴重書ライブラリー（Dibner Library of the History of Science and Technology）手前、隣接したスペースにスミソニアン・ライブラリー・ギャラリー（Smithsonian Libraries Gallery）がある。ここで展示が行われている【写真3】。

視察調査時は“Cultivating America’s Gardens”という展覧会を開催中であった【写真4】。



【図版3】トレーディングカード

- 左 1999.011.003, Seed trading card [carrot man]. C. Ribsam & Sons, Trenton, New Jersey, 1880s.
- 右 1999.011.001, Seed trading card [celery girl]. Rice’s Seeds, Cambridge, New York, 1887.

Smithsonian Gardens, Horticultural Artifacts Collection

1880年代、花や野菜の種を販売する会社によって宣伝用につくられたというトレーディングカードの絵図版【図版3】をキャラクターのように使って、空間がつくり出されていた。

展示ケースのひとつを取り上げてみる。“victory gardens”という表示がある。これは第一次世界大戦中、ときのウィルソン大統領が食糧不足になる可能性を回避するために、野菜を植えるよう国民に要請して登場したものという。第一次・第二次大戦中、人々は庭・校庭・空地などを菜園に変えることによって戦争を助けた。勝つためにということで、愛国的義務としてのチャレンジだったという<sup>4)</sup>。

ケースの中には、“Gardens for Victory” (1942) “World’s Finest Comics, Issue No.11” (1943) (漫画の表紙。スーパーマンやバッドマンといったアメリカンコミックのヒーローが農作業中) といった本が展示されていた。一般に図書館・図書室展示では、ふだんみることができない貴重な本、あるいはテーマに則した本をとりあげるものであろう。スミソニアン・ライブラリー全体では1830年～現在までのガーデンブックを所蔵しているという<sup>5)</sup>。

他方、同じケースの中には、ポスター (1943) (“CAN ALL YOU CAN” “IT’S A REAL WAR JOB!” とある) や立体物であるスコップや圧力鍋 (1950s) といった博物館資料も展示されていた【写真5】【写真6】。

これらの所蔵・提供は国立アメリカ歴史博物館だけでなく、外部機関から、というものもあった。

ここには、博物館図書室と博物館展示の連携、図書資料と博物館資料の連携、ライブラリアンとキュレーターの連携といったことがみてとれる。ライブラリーのギャラリーであれば、通常は図書資料のみの展示で、関連する資料の類はパネルやコピーで補うのが手取り早いと思われるが、ケースに入っていたのは実物の博物館資料である。ライブラリアン単独で行えるものではない。

インタビューしたところによれば、(1) 全ての企画がということではないが4～5人のチームで動く (2) キュレーターと連携してライブラリアン主体で動くなど企画内容によって様々である、とのこと。併せて (3) ライブラリアンの企画立案で著名人をよぶこともある (4) ライブラリアンによる関連講座もある、とのことであった。

今回のスミソニアン・ライブラリー・ギャラリーの展覧会 “Cultivating America’s Gardens” の観覧者の中には、さらに国立アメリカ歴史博物館の展示室を覗きみよう、資料を提供している外部機関の情報を調べてみよう、あるいは図書室で関連する本をみて理解を深めよう、という人も出てくるはずである。国立アメリカ歴史博物館とその図書室の内部連携によるところであり、そこに一役買っているのがスミソニアン・ライブラリー・ギャラリーということである。

### 3. ニューヨーク公共図書館の展示と連携の可能性

ワシントンD.C.からは陸路、アムトラック (鉄道) でニューヨークへ移動。世界的に著名な博物館・美術館がこの都市に集まっていることは言うまでもないが、ここでは、

#### ③ 図書館の展示と連携の可能性

という視点から、ニューヨーク公共図書館の事例にみる【写真7】。

ニューヨーク公共図書館の“公共”とは公立という意味ではなく公衆のためのという意味である、とはよく書かれるところである。非営利民間団体による図書館ということである。今回訪れた本館（新館 Stephen A. Schwarzman Building）は1911年に開館している。鉄鋼王と称された実業家カーネギーが寄付金を施している<sup>6)</sup>。

内観・外観あわせみて、総大理石づくりの建物と内装自体がまるで展示物のようであったが、ニューヨーク公共図書館ではこの建物を見学するツアーが行われている<sup>7)</sup>。また、博物館のように展覧会も行われている。

視察調査時には“*You Say You Want a Revolution*”という1960年代回顧展を開催中であった【写真8】。タイトルはビートルズ「レボリューション」(1968)の歌詞フレーズからであり、2018年はこの曲がリリースされた年からちょうど50周年にあっていた。展示は音楽試聴のブース、セクシャリティとジェンダー・新左翼・ベトナム戦争・公民権とブラックパワー・カウンターカルチャーなどのコーナーから構成され、展示品には草間彌生デザイン編集のマガジン(1969)、マーティン・シャープによるボブ・ディランまたゴッホ自画像のサイケデリックポスター(1967)、ウッドストックコンサートのポスター(1969)、ほか“BLACK is Beautiful”の標語やキング牧師の写真などの入ったボタン(円形のバッジ)、作家テリー・サザーンのタイプライターなどといった立体物もあった。他機関から提供された資料も多数あり、それは図書館の展覧会の域を超えた内容といっているものであった。

この回顧展はカーネギーホール(Carnegie Hall)の“The ’60s : The Years that Changed America”というフェスティバル・イベント・展示の一部として連携して行われたものという。カーネギーホールは1891年に開館、その名称からもわかるとおりカーネギーによって建てられている【写真9】。“カーネギー”というキーワードからみても、これらがつながっていることは興味深いことであった。地理的にも、これらは歩いて行ける距離にある。蛇足ながら、カーネギーの邸宅は今日クーパー・ヒューイット・スミソニアン・デザインミュージアム(ライブラリー)になっている。

併せて、このニューヨーク公共図書館から歩いて行ける距離に、ロックフェラーセンターを挟んだかたちでニューヨーク近代美術館(The Museum of Modern Art <MoMA> New York)がある。1929年に開館(設立にロックフェラー2世夫人が関係するのは知られるところである)。視察してみて、その所蔵品として著名な「星月夜」と上記のサイケデリックポスターが“ゴッホ”というキーワードでたまたまつながったりもしたが、これに限らず、今回の回顧展の展示品の中にはニューヨーク近代美術館のそれと結びつくところがみられ、連携の可能性ということを考えさせられた。

## おわりに

スミソニアン博物館群の各館図書室は、スミソニアン・ライブラリーとしてひとつの管理運営組織に括られていて、各館図書室蔵書を横断的に検索できるシステムを有していること。これは、東京都歴史文化財団の東京都江戸東京博物館・東京都現代美術館・東京都写真美術館・東京都美術館・東京文化会館の図書室においても参考、応用できるところがあるであろうと思われた。

博物館図書室からみた館本体との内部連携。また、難しいことかもしれないがニューヨーク公共図書館の展覧会とカーネギーホールのフェスティバル・イベント・展示の連携事例にみるように、外部機関・類縁機関との共通部分を見出して地域的・歴史的に連携すること。これも、ヒントとなるところがあった。

(謝辞)

Freer Gallery of Art and Arthur M. Sackler Gallery Libraryの吉村玲子氏、あわせてSmithsonian LibrariesならびにSmithsonian Gardensの皆様へ感謝します。

## 【註】

- 1) <https://library.si.edu/50th-anniversary>
- 2) <http://collections.si.edu/search/>
- 3) <https://library.si.edu/research>
- 4) <https://library.si.edu/exhibition/cultivating-americas-gardens/gardening-for-the-common-good>
- 5) <https://library.si.edu/exhibition/cultivating-americas-gardens/digging-in-at-the-smithsonian>
- 6) 1911年にニューヨーク・カーネギー財団を設立。カーネギーはアメリカだけでなく世界の国々に無料で利用できる公共図書館をつくるということで寄付を続け、つくられた図書館は2,500以上あるという。その慈善事業において、石油王と称されたロックフェラーにも影響があったとみられ、1913年にロックフェラー財団が設立されている。  
参考：『図書館を心から愛した男 アンドリュー・カーネギー物語』アンドリュー・ラーセン カティ・マレー 志多田静 訳・六耀社・2017  
『未来をつくる図書館－ニューヨークからの報告－』菅谷明子・岩波書店・2003
- 7) 当日参加してみた（事前予約せずとも、人数に空きがあれば、受付でワッペンシールをもらい、それを付けて参加可）。東西問わず、いろいろな国々の方々が参加していた。英語による説明。閲覧室のことだけでなく、例えば建物の大理石壁や装飾のちょっとしたエピソード、また展覧会についても簡単な説明があった。

国立アメリカ歴史博物館図書室



【写真1】



【写真2】

スミソニアン・ライブラリー・ギャラリー



【写真3】



【写真4】

スミソニアン・ライブラリー・ギャラリーの展示例



【写真5】



【写真6】

ニューヨーク公共図書館の外観と展覧会のタブロイド紙



【写真7】



【写真8】

カーネギーホールの外観



【写真9】